鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館だより

やまびこ 特別号 374号

リードン　ヨンデール
©Tsuchida Yoshiharu

図書館で見つける？日常を彩る新しい趣味

新年度になりました。雪もやっと降らなくなり、木々や草花が色づき始めるこの季節、気持ちも心なしか晴れやかになる方も多いのではないでしょうか。窓の外に広がる柔らかな緑や、ふとした瞬間に香る春の風は、私たちに「何かを始めてみようかな」という前向きな活力を与えてくれます。そんな時期だからこそ、新しいことに挑戦し、日常を彩る趣味を増やしてみるのはいかがでしょうか。

冬の間は天気が悪く外に出ることができなかった、普段は車移動ばかりで体がなまっている…という方は、ウォーキングやランニングなどで体を動かす趣味を始めるのがおすすめです。いきなりハードな運動をするのはちょっと…いう方も、まずは近所を散歩して、足の裏に伝わる地面の感触や春の空気を感じることから始めてみませんか。普段は見落としていた道端の小さな花や、新しくオープンしたお店など、あえて歩くことで今まで見えなかった街の魅力に気づく、再発見の旅になるはずです。

また、食を通じて季節を愛でるのも素敵な趣味のひとつです。春が旬の食材といえば、甘みの強い春キャベツや瑞々しい新玉ねぎが思い浮かびますが、4月から6月にかけてはアスパラガスも旬を迎えます。ベーコンと一緒にソテーしたり、ジューシーな豚バラ肉を巻いて焼いたりと、レシピの幅は驚くほど多彩です。こうした旬の食材を丁寧に調理し、その時期一番の美味しさを味わうことは、私たちの心と体を整え、季節の移ろいを慈しむ豊かな時間をもたらしてくれます。

図書館には、こうした運動や料理の実用書はもちろん、まだ見ぬ世界へと誘ってくれる多彩な本が揃っています。例えば、散歩のついでに見られる野鳥の図鑑や、初心者にやさしい家庭菜園の本、あるいは写真で巡る旅の記録など、あなたの「やってみたい！」を後押しするヒントが至る所に並んでいます。

新しい一歩を踏み出すとき、本はいつも心強いパートナーになってくれます。この春、あなたを夢中にさせる何かが、本棚のどこかで静かに開かれるのを待っています。ぜひ、新しいお気に入りを見つけに図書館へ足を運んでみてください！

＝図書館で見つける「新しい趣味」関連本＝

- 『源氏物語入門』高木　和子(2023)
- 『ミュージアムを知ろう』横山　佐紀(2020)
- 『やすこーんの鉄道イロハ』やすこーん(2021)
- 『はじめてのテラリウム』勝地　末子(2016)
- 『かわいい禅画』矢島　新(2016)
- 『マンガでわかる歌舞伎』(2017)
- 『今日からはじめるばーどらいふ！』一日一種(2021)
- 『ちょっと自慢できるヒコーキの雑学１００』(2019)
- 『できる！わかる！うごく！１０代からのプログラミング教室』矢沢　久雄(2025)

＝先月結果発表された賞＝

第６０回吉川英治文学賞

受賞　『どら蔵』　朝井まかて

1月1日から12月31日までの1年間に最も優秀な作品を発表した作家に贈呈される。候補作家は様々な業界の関係者や文化人による推薦によって選出されている。

令和８年４月１日発行
鶴岡市立図書館・鶴岡市郷土資料館
〒997-0036
鶴岡市家中新町 14-7
（図）TEL：25-2525（郷）TEL：25-5014
FAX：25-2526

4月の新着図書

リクエスト・予約開始は **4月10日（金）** です

◎小説・エッセイ

- ●ノーウェア・ボーイズ(井上　先斗)
- ●舞う砂も道の実り(井戸川　射子)
- ●劇場という名の星座(小川　洋子)
- ●夫を亡くして(門井　慶喜)
- ●明日、あたらしい歌をうたう（角田　光代）
- ●花檻の園（北沢　陶）
- ●白百合（徳田　秋聲）
- ●青のナースシューズ(藤岡　陽子)
- ●山田太郎の話（水沢　秋生）
- ●スコッパーの女（山白　朝子）
- ●オネエ所長の調査ファイル（山崎　浩治）
- ●エデンの裏庭（吉田　篤弘）
- ●問いつめられたおじさんの答え（いがらし　みきお）
- ●ちょっと角の酒屋まで（角田　光代）
- ●おしゃべりから始める私たちのジェンダー入門(清田　隆之)
- ●なんのこれしき！（佐藤　愛子）
- ●消失(パーシヴァル・エヴェレット)
- ●記銘師ディンの事件録（ロバート・ジャクソン・ベネット）
- ●オイディプース王（ソポクレース）

◎実用書

- ●友だち以上恋人未満の人工知能（川原　繁人）
- ●禁じられた装丁（ミーガン・ローゼンブルーム）
- ●変な心理学（山田　祐樹）
- ●葬式坊主なむなむ日記（松谷　真純）
- ●昭和レトロ(地球の歩き方編集室)
- ●47都道府県だけじゃない日本の分け方(成美堂出版編集部)
- ●高市早苗が習近平と朝日を黙らせる(高山　正之)
- ●バカ裁判傍聴記（阿曽山大噴火）
- ●裁判官の正体（井上　薫）
- ●捕食（清水　將裕）
- ●飲酒と社会の交差点（小野田　美都江）
- ●自然災害のトリセツ（高橋　典嗣）
- ●脳がないのにクラゲも眠る（粂　和彦）
- ●世界ひと皿紀行(岡根谷　実里)
- ●農家が教える草を生やす農業（農文協）
- ●それでも「さよなら」が訪れる夜もある(夜の獣医師ゆってぃー)
- ●おいしい外来種(あおば)
- ●１本の線からはじめる絵の描き方教室(高原　さと)

◎児童書

- ●本の帯を作ろう　（櫛谷　孝徳）
- ●古代文明ビジュアルブック（近藤　二郎）
- ●縄文・弥生・古墳時代のくらし（西谷　大）
- ●仕事に行ってきます　1-18
- ●もっといろんな人に聞いてみたなんでその仕事をえらんだの？　1（鈴木　俊貴）
- ●伝えたい日本の郷土料理　焼く（日本食生活協会）
- ●ほんとうのおおきさいきものずかん(多田　多恵子)
- ●ズーミング！動物園（小宮　輝之）
- ●クラゲのくらし（水口　博也）
- ●みつけた！職人さんの和のカタチ　1-2(瀬戸山　玄)
- ●見分けてみよう！おいしいやさいど～れだ？春・夏(網野文絵)
- ●かっこいいピンクをさがしに（なかむら　るみ）

◎絵本

- ●キリンリンリン（アリムラ　モハ）
- ●呪いのスマホ（有田　奈央）
- ●やばいやばい（太田　久美子）
- ●きゅうしょくのじかん(加藤　休ミ)
- ●ノラネコぐんだんこんにちは（工藤　ノリコ）
- ●ねこいる！いる！（たなか　ひかる）
- ●ほしのぎんか（グリム）

TSURUOKA_LIBRARY

鶴岡市立図書館　Instagram　開設しました！

イベントや館内のお知らせなど続々投稿予定です
左の二次元コードからぜひフォローしてご覧ください！

やまびこ号の次回巡回日は

月　　日です

新着図書は上記以外にもありますので、お気軽にお声がけください。
新刊は、ホームページでもご覧いただけます。

藩主の磯釣り（２）

２月に発刊された、佐藤賢一氏の『釣り侍』（新潮社刊）が大きな話題を呼んでいる。庄内を舞台にしたこの作品は、家中新町とか鍛冶町、三瀬村など、実際の町村名も使われており、鶴岡に住む人であればこそ、城下の位置、海までの距離感、海岸沿いの様子などがリアルに感じられる面白さがある。ネタバレになるので、細かいことには触れないが、この小説では藩主の磯釣りが藩の命運を握るように設定となっている。実は、令和4年4月の「やまびこだより」に4代藩主忠真と5代藩主忠寄の磯釣りについて書き、「次号は忠発です」と予告していたが、気が付けば3年の歳月が過ぎておりました。大変失礼しました。

さて、忠発といえば、「日本最古の魚拓」となる一尺弱の鮒を釣った人物として知られているが、この忠発が温海温泉に滞在するべく、嘉永3年（1850）8月22日に鶴岡を出立し、9月15日までの滞在期間、六回ほど磯釣りに出掛けている。この時の様子は「御入湯ニ付公私日記」という史料に大庄屋本間喜平治の目線で詳細に記されているが、藩主の釣り場（現在の大岩漁港の手前に「御釣場」という岩場があり）には幕が張られていたらしく、8月26日には以下のような記述がある。

明六ツ半時（午前七時）、御供揃の御高触、前ニタ方これ有り、正五ツ時頃(午前八時)御立岸のしたへ入らせ、少し御跡より女中も御釣場岩へ御出、尤御幕打たせられ申候、

御幕ハ三張、前夜ニ棹十三本共、御用屋迄御渡、明日差図致すべき趣ニテ持打方私共へ山口三郎兵衛殿御差図ニ付、兼テ備置候縄鎌持参之人足へ差図いたし打たせ申し候、此度御釣場岩々西向表ニシテ御便所玄関より山手之方、門手一図包ム、二ヶ所ニ打たれ、一ケ所ハ御焚出処ニ御用之よし、

これによれば、藩主が竿を出す岩場には3つの幕が張ってあったとのこと。恐らく領民たちに藩主の釣りをする姿を見せないようにする配慮だったと思われるが、釣場には御供の藩士だけでなく、女中たちもいたらしく、少し離れた場所にトイレを設置したり、昼食を提供するべく焚出（炊き出し）も設置していたようだ。

では、藩主の磯釣りにどれほどの人数が随行していたかというと、「温海御入湯ニ付、色々遣人足口上帳」によれば、8月26日の記述では、以下の通りとなる。

朝磯模様見（一人）、御道案内（一人）、御供頭以下（八人）、御用人（一人）、
御料理人(一人)、御坊主（一人）、御持筒（一人）、御台所もの持（十四人）、
御中間（十二人）、御台所より浜へ御肴持（二人）、女中もの持（五人）、
御幕並くし持（三人）、薄縁もち（二人）、海老もち（四人）、御迎提灯持（九人）、
御供頭提灯持（一人）、松明持ち（十一人）、海老漬場囲遣（四人）

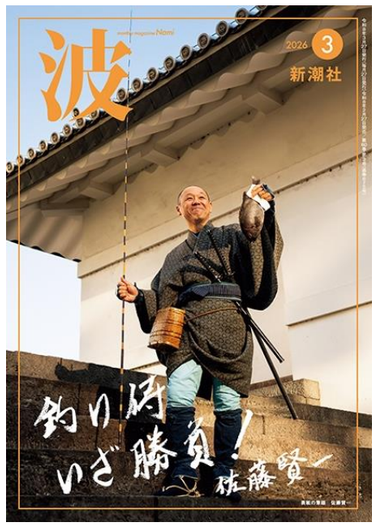
合計すると82人になるが、この中には湯温海村の藩主たちの宿泊場（小四郎宅が割り当てられた）から魚の運搬を担当する者もいて、料理人が現地で調理していたことになる。また、エサとなる海老は浅瀬にでも囲っていたのか、「海老漬場囲遣」に4人も割かれ、そこから海老を持ってくる役も4人いたようだ。さらに、藩主の身の回りを世話する「坊主」や、銃を持った「持筒」といった、この場に不釣り合いな感じがする者たちもいた。ともかく釣場は人でごった返していた状況が想像されるだろう。

ところで、忠発は温海方面だけでなく、「浜遊」と称して、加茂方面に出掛けることも度々だった（「公用録」大屋家文書）。例えば、嘉永4年(1851)9月2日に朝から鍋岩（加茂水族館の駐車場から海岸に下ったあたり）・鼻くりという岩場で釣っていたが、途中雨に降られ、春日神社で雨宿りしたとある。それから1日置いて、4日に再び同所で、さらに10日には朝から鍋岩で終日、休憩もなく釣り続けていた。日を置かず加茂に出掛けることから、忠発は余程この場所が気に入ったのかと思われる。

一方で、藩主が我が村に来ているとなると、村人もソワソワするのか、献上品（この場合は地魚）を差し上げることが度々あった。忠発も毎度毎度のことで煩わしいと思ったらしく、この時は献上の品は無用という御触れを出していた。しかしながら、この日、大屋八郎治の弟の政之助がテンコ(メバル)とタナゴを大量に釣り上げたらしく、次衆が申すには、そのテンコとタナゴが魚屋から買ったモノでなく、釣り上げたモノなら、献上しても構わないとのこと（ちなみに、この日の忠発の釣果は芳しくなかったらしい）。その知らせを受けて、八郎治は羽織袴を身に着け、忠発が釣りをしていた鍋岩に参上し、テンコ20匹、タナゴ20匹を献上するに及び、忠発からは「美（見）事の勝負」という言葉を賜ったという。残念ながら、史料には忠発の釣果を記した記録はないが、ともかく庄内藩では藩士も殿様も磯釣りを楽しんでいたようだ。

郷土出身作家
佐藤賢一先生最新作！

佐藤賢一『釣り侍』(新潮社刊)
雑誌・小説新潮で引き続き連載中！
2026年4月号にも掲載されています



あわせて読みたい

・佐藤賢一『歴史小説のウソ』(ちくまプリマー新書)
歴史小説家の佐藤賢一先生が歴史小説の“ウソ”について書く！？歴史コンテンツファン必読の一冊。

・雑誌『波　2026年3月号』(新潮社)
佐藤賢一先生が釣り侍の姿で表紙に。刊行記念インタビュー掲載。あとがきまで庄内たっぷり！

・雑誌『青春と読書　2026年4月号』(集英社)
佐藤賢一先生新連載「武士と騎士」掲載開始！